

苫東 自然と共生焦点

朝日新聞
2013.11.25

大規模工業基地に希少鳥類

日本野鳥の会が、大規模工業基地の苫小牧東部地域（苫東）の安平川流域の弁天沼周辺の温泉や草原などで7種の希少鳥類が確認されたと発表。「苫東に残された貴重な自然」の保全を求めている。開発を担う第三セクター「株式会社苫東」は、開発可能な土地を多く確保しておきたい一方で、「環境と共生する産業地域」を掲げている。両立はなるのか。



る1万7000㎡に及ぶ。株式会社苫東によると、分譲用地は現在55000㎡（売却済みは10520㎡）で、全体の3割に当たる約32000㎡は緑地として残す計画だ。

タンチョウも

大規模工業基地を目指して勇払原野で開発を進めてきた苫東の用地は、苫小牧市、安平、厚真町の1市2町にまたがり、山手線の2期にまたがり、山手線の内側面積の1・7倍に当たると見られる。日本野鳥の会は野鳥繁殖期（5～8月）の弁天沼周辺を中心に鳥類調査を実施。



企業側と保護団体 調整続く

昨年に続き確認されたのは、絶滅危惧種のシマクイナ、アカモズ、チュウヒ、オジロワシ、準絶滅危惧種のマキノセンニュウ、オオジシギ。今年初めて、タン

チョウのつがいも確認した。野鳥の会は2000年から継続して調査を実施、06年には「ウトナイ湖・勇払原野保全構想」をまとめ、保全を訴えてきた。タンチョウは近年、繁殖地を失っており、調査を担当する同会の原田修レンジャーは「つがいの行動か

ら、繁殖を試みた可能性もあり、来年以降の動向に注目したい」。さらに「苫東の中でも弁天沼周辺の温泉は植生や野鳥の希少種にとって代わる場所がない大切なエリア」と説明する。



北電の火力発電所を背に、苫東に残された温泉を飛ぶタンチョウ。苫小牧市、日本野鳥の会提供



①チュウヒ②アカモズ=いずれも苫小牧市、新谷幸嗣さん撮影



カギは遊水地

こうした中、希少鳥類の生息地保全のカギを握るのは、安平川の治水対策として弁天沼周辺の湿地に計画されている河道内調整地（遊水地）の範囲をどう線引きするかだ。遊水地に指定されると開発はできなくなり、自然環境は保全される。ただ、開発用地がせまることなどを理由に地元経済界などからの反発もあり、当初検討されてきた15000㎡から約9500㎡に縮小された経緯がある。

遊水地の範囲を決める話し合いは、株式会社苫東や野鳥の会、道、苫小牧市などの担当者が参加し、道室建設管理部が事務局をつとめる「安平川下流域の土地利用に関する連絡協議会」で続けられている。弁天沼周辺の温泉は現在、未利用地として残されているが、開発側担当者からは「将来に開発の余地を残すためにも、（利便性から）道道上厚真苫小牧線の南側に一定の開発用地を確保したい」という意見が出

る一方で、野鳥の会は「弁天沼北西部の道道南側の温泉地域は特に重要。遊水地に組み込んで欲しい」と要望。室蘭建設管理部は「それぞれの意見を調整し、今年度中に結論を出したい」（治水課）としている。

株式会社苫東の望月幸泰専務は「用地確保は大切なが、企業誘致の際に、自然環境に恵まれた苫東は高く評価されている。企業立地と環境保全のバランスのとれた形で結論が出ることを望みたい」と話す。

苫東地域では市民団体による森づくりも進められている。株式会社苫東と協定を結び苫東用地内で、雑木林の整備やフットパスづくりなどに取り組むNPO「苫東環境コムズ」の草刈健事務局長は「苫東には温泉だけでなく、北限域のコナラ林やハスカップの原生地など豊かな自然がたくさんある。『環境との共生』をもっと前面に出した苫東の全体構想を打ち立てて欲しい」と話している。

(環境課)